

平成三十年 秋

句心が 薄れ寂しき 秋の風
句心が 戻りゆかしき 秋の色
台風に 電気さらわれ 往生す (二十一号で九月四日より四晩闇の生活)
彼岸花 時期^{とき}をたがえず 緋を燃やす
曇天に 名月かすみ 悔み酒
遠太鼓 祭り近しと 精がない
野分去り 虫の音戻る 朝まだき 浅き眠りに 浮かぶ薄明
秋晴れや 小枝揺れてる 優しげに
ごみ収集日 カラス騒然 一段と スノーズ機構の 天然目覚まし
倒木の 切り株哀れ 白き顔 (二十一号の傷跡)
敬愛を 悲しみ超えて 秋空へ

平成三十年 冬

いつか来る きつと来る来る 春日和
暇透く 陽だまり温(あつ)き 日向ぼこ
年の背に 始業のチャイム 寒空に ユタリと流れ 時と抗う
キラキラと 星降るごとき 野辺の霜 煌めく朝に 今を生き継ぐ
風を友 寒さ暑さを 道連れに 朝のジョギング 日々新しき
初日浴び 池辺に座して 瞑想す 聞きなれし音 混じり巡りぬ
完(まる)き月 寒天にさえ 我諭す
白梅の 丸き蕾に 早会えり
うつうつと 不機嫌宿り 春遠し

平成三十一年 春

朝日跳ね きらびらやかに 金と銀 水面に散りて 花の光がけ
鶯の 声が途絶えて 華もなし
花冷えに 令和の響き 凜と冴え
味気なき 日々の暮らしに 孫が来て 明日の疲れを いとわず尽くす
仰ぎ見て 若景吹く頃 うまし息

風立ちぬ 緑（あお）を揺らしに めぐりさぬ

平成三十一年 夏

蝉の声 薄れて寂し 暑さかな

つややかに 朝日を返し 漆喰の すぎき嘴 ニヒルやカラス